

欲望と描写の拮抗—シャーロット・スミスの 『オールド・マナ・ハウス』

細 川 美 苗

1 作家と作品

シャーロット・スミス（1749—1806）は現在ほとんど読まれることのない作家であるが、18世紀後期においては「最も人気のある作家の一人」であった（ビショップC.ハント80）。そのため彼女が同時代の作家に及ぼした影響も大きく、特にロマン派詩人ウィリアム・ワーズワスに与えた影響が論じられることが多い。ワーズワスは1791年にブライトンに住むスミスを訪ねている¹⁾。彼女の生年は現在でも不確かで、おそらくは1749年5月4日に生まれたということで批評家の意見が一致している。生まれた場所に関してはさらに不確かで、ロンドンという説やサリー州であるという意見がある²⁾。

シャーロットは裕福な家庭に生まれたが、2歳のときに母親が弟を出産する際に命を落とし、田舎の母方の叔母に育てられた。幼い頃からサセックスの自然の中での体験を詩で表現し、「ワーズワスに10年も先立って、現在の批評家が景観と自然に関するロマンティックな感情と呼ぶであろうものを持って描いた」（『オールド・マナ・ハウス』イントロダクション9）。その後スミスは裕福な家庭の娘として社交界への参入を成功させるため、ファッショナブルなケンジントンの学校へ行き、年頃となる12歳には退学した。1761年には父親は

1) この事実に関してはハントが詳細に論じている。

2) スミスの生年の不確かさに関して、女性作家の場合は非常に広く読まれた人物に関してさえも残された情報が少ない点をラベは指摘し、女性作家が軽視されてきた傾向を示す事実としてあげている。

多くの借金を負っており、地所のひとつを売りに出さねばならない状況であったため、彼女の退学は学費を節約するためという説もある。

父親の負債はシャーロットの社交生活にあまり影響を与えず、彼女は12歳から14歳まで社交界での生活を楽しんだ。この時期にも多少の詩作をしたものの、シャーロットは平均的な十代の少女で、当時の言葉を使えば「軽薄で無思慮」(『オールド・マナ・ハウス』 イントロダクション10)な娘であった。しかし父親の借金は膨れる一方で、これが彼女を作家へと押しやる引き金となる。シャーロットが15歳のとき父親は自分を負債から解き放ってくれる裕福な夫人と再婚した。継母と娘の家庭内での緊張を解決する手段は簡単であった。シャーロットは西インドに広大な土地、東インドに利権を持つロンドンの商人の息子ベンジャミン・スミスと結婚させられた。

シャーロット同様ベンジャミンも裕福に育っており、決してひとつの仕事に長く就くことはなく、贅沢を極めた放蕩を楽しんでいた。結婚後数年でベンジャミンは彼の父親が支払うこともできない負債を抱えていた。ベンジャミンの父は息子の行状を見かねて、孫に全ての財産を残した。スミスと夫は1765年から1785年まで20年間共に暮らし、その間スミスは12人の子を産んだ。子供たちのうち7人が生き延びた。スミスは1787年に正式に夫と別居した(離婚ではない)が、18世紀の英国結婚制度の下では、スミスの全ての財産は法的には夫のものであり、彼女は常に経済的に苦しい状態におかれた。必要に迫られたスミスは、以前は余暇の楽しみであった執筆を職業として選んだ。つまり無責任で残虐な夫との結婚が、スミス作家へと押しやったのである。その際スミスは出版された本に「自分のフルネームと[結婚前の家の]領地を記すという珍しい行為をとった」(『オールド・マナ・ハウス』 イントロダクション12)。「ベンジャミン夫人」ではなく「シャーロット・スミス」という個人名と弟が相続している両親の所有地を示す行為は、夫に完全な従属を強いられる既婚夫人の社会的立場を拒否する姿勢であるとラベは評価している(『オールド・マナ・ハウス』 イントロダクション12)。

1793年に出版された『オールド・マナ・ハウス』の舞台は1770年代で、オーランド・ソマリヴという若者とモニミア・モリジンという少女の恋愛を軸に展開する財産相続の物語である。タイトルである古い屋敷に住むのはレイランド夫人で、未婚で子のない彼女の莫大な財産が物語を動かす中心要因である。ソマリヴ家とレイランド家は親戚であるが、ソマリヴ家はレイランド夫人の叔母が「ヨーマンに過ぎない者」（『オールド・マナ・ハウス』37-38）と結婚したことによりレイランド家と姻戚関係となった家系であることから、レイランド夫人は彼らを見下し、ソマリヴ家に財産を残すことを渋っている。しかしレイランド夫人はソマリヴ家の次男であるオーランドにレイランド家の血筋を見出し、彼に財産を残すような素振りを見せている。経済的に苦しいソマリヴ家を救う望みは、オーランドがレイランド夫人の機嫌を損ねず、財産を首尾よく相続することにかかっている。

オーランドが財産を獲得するには、ヨーマンとの結婚のために穢れてしまったと夫人が考えるレイランド家の高貴な血筋を、オーランドが回復していることをレイランド夫人に示さねばならない。血筋を何より気にかけるレイランド夫人が、オーランドとモニミアの恋愛を認める望みはない。モニミアはレイランド邸の召使レナード夫人の親戚で、素性も怪しく身分は低いからだ。

レイランド邸の召使たちもそれぞれ夫人の財産を分捕る思惑を抱えている。オーランドとモニミアの恋愛を察したレナード夫人は、モニミアがオーランドを誘惑したとなると自分への財産分与が不利になると考え、モニミアを塔に閉じ込めて二人の恋愛の邪魔をする。ソマリヴ家のほうでもオーランドの財産相続に一家の望みをかけていることから、モニミアとオーランドの関係には大反対である。このような状況から二人の恋愛は、塔に幽閉された姫と彼女を訪れる騎士というロマンスに近い展開となる。

小説中オーランドはアメリカ独立戦争へ英兵として出兵する。オーランドは大陸でインディアン³⁾に襲撃され捕虜となる。その際同行していた黒人召使は首尾よく逃げ出しイギリスへ戻り、オーランドは死んだという誤った情報を家

族に告げる。オーランドは友好的なインディアンのおかげでカナダ経由で脱走し祖国にたどり着く。乞食同然で故郷にたどり着くものの、家族はロンドンへ引っ越しており、モニミアは行方不明であった。オーランド従軍中にレイランド夫人は亡くなっており、財産の一部がレナード夫人へ残された以外は教会へ寄付されていた。以前はオーランドの財産相続を期待して親切に振る舞っていた近隣住人の態度も、文無しのオーランドには冷たいものであった。

しかしオーランドは夫人が死に際にソマリヴ家と和解し、自分がレイランド姓を名乗ることを条件に財産を相続するという遺言が作成されたという噂を聞きつける。彼は自分の留守を良いことにレナード夫人が彼女に有利な古い遺言状を執行したのだと確信する。オーランドは偶然モニミアと再会して結婚し、自分に財産を残した遺言状を発見する。

先に示したようにスミスの小説は当時かなり広く読まれたものの現在ではほとんど読まれず論考の対象になることも少ない。本作品に関してはロレイン・フレッチャーがジェイン・オースティンの作品全般に影響を与えていると論じ、特に『マンスフィールド・パーク』の種本に近いのではないかと指摘している。またジョセフ F. バートロメオは当小説をチャールズ・ディケンズの『大なる遺産』のソースとして分析している（“Charlotte to Charles”）。

キャスリン R. キングはモニミアがオーランドの助けで読み書きを身につける事を、針をペンに持ち替えて男性的な領域へと踏み出そうとする女性の欲望として評価するものの、その欲望はオーランドがモニミアの読書や解釈行為を検閲することによって、オーランドのピグマリオン願望、つまり彼の理想の女性へとモニミアを形成しようとする欲望へと回収されていくと指摘している。キングはまた物語終盤においてオーランドと結婚したモニミアが家計を助けるために夫に隠れて針仕事に従事する事を、家父長制の中でペンを持つとしようとする女性の欲望が結局針仕事へと頓挫してゆく図式として解釈している。それにも

3) アメリカ原住民のことであるが、小説中インディアンと表記されているので本稿ではそれに従う。

かかわらず一般的には完全に受身の完璧な娘像，お姫様キャラクター，ジャクリン M. ラベの言葉を借りれば，「おばによって代替される意地悪な継母に支配された御伽噺の登場人物」（“Metaphoricity and the Romance of Property” 222）であるモニミアの行動に能動的な女性の欲望を指摘している点は重要である。

キングはペンを持つ行為と対照して針を持つ行為を女性の家庭空間への封じ込めと考えているが，彼女に先立ちバートロメオはモニミアが最終的に手にすることになる針に関してより肯定的な解釈をしている（“Subversion of Romance”）。一貫してロマンスの理想を掲げ，その枠組みから逸脱する行動をとらず，切迫する家計を立て直すために現実的な行動を取れないオーランドに対して「モニミアは，家計を助けようという妻の申し出を拒絶した誇り高い夫に知らせることなくリネンの針仕事に家庭で従事するという意味深い行動をとる」（“Subversion of Romance” 654）とバートロメオは評価し，モニミアの針仕事を当小説内で拮抗するロマンスと経済的現実という二極のうちの後者の領域へと踏み込む果敢な行為であると論じている。彼の論はロマンスを女性的な現実離れした領域，経済的現実世界を男性的領域とみなして，孤児で女性という社会的弱者の要素を重ねて負わされたキャラクターであるモニミアが，幽閉された状態から積極的に経済活動を始める自律のプロットを跡付けている。バートロメオは作品に登場する女性キャラクターに注目しており，オーランドの運命を支配するレイランド夫人に関しても，オーランドの将来を決定付ける力，つまりオーランドを意のままに形成する支配力があると論じ，その影響力を作家スミスの持つ権威にまで関連付けている（“Subversion of Romance” 655）。確かに彼女の生死に関わらず物語を動かすものはレイランド夫人の will（意思，遺言）である。

ラベは『オールド・マナ・ハウス』を「資産に関するロマンス」と呼んでいる（“Metaphoricity and the Romance of Property” 217）。『オールド・マナ・ハウス』においてオーランドのモニミアへの愛は常に財産相続問題に阻まれる運命にあり，恋愛と相続問題は切り離せない。その点を明らかにした上でラベは，

非現実的なロマンスの世界と法や相続問題に関する物語が並行して展開されることが、社会が自然であると考える愛や結婚制度、夫の管理下におかれる既婚夫人の立場、長子相続制等の社会制度の不自然なありようを浮き立たせ、所有やそこから派生する権力のあり方に問題提起をする効果を生じさせると論じている。

アナ・ウデンは受容理論の観点から当小説を分析している。彼女は女性作家による小説の主に女性とされる内包された読者と男性批評家の両方の期待を満たすためにスミスが用いる語りの技法として自由間接語法を取り上げ、感傷小説に特有の内面吐露とロマンスへの耽溺を現実的な目で突き放すアイロニックな視点を『オールド・マナ・ハウス』に見出している。ウデンもラベと同様にロマンスの掲げる理想に忠実なキホーテ・キャラクターであるオーランドと彼を取り巻く反ロマンス的な世界のギャップを指摘しつつ、『オールド・マナ・ハウス』においては二つの領域が拮抗している(140)と論じている。ウデンの論の重要な部分は、当時小説が担っていた教育的な意味を考慮しつつ、女性とされる内包された読者が、オーランドの理想とするロマンスには共感せず、ロマンスを揶揄する視点を共有するであろうことをスミスが期待していたと指摘している点である。彼女は巡回図書館や貸し本屋などで小説を利用する人口の約70%は男性であったというポール・カウフマンの研究を援用し、当時の批評家によって想定される若く未経験なナイーブな読み手としての小説読者層が仮定的なものであると述べている。つまり大げさに感情を告白し、時代遅れのロマンティックな行動をとる主人公が現実的でないという視点を一旦棚上げにして、物語世界に共感する読者を想定することによって、現実離れた宮廷恋愛を提供しつつも過度の感情に突き動かされる登場人物に距離をとる語り手を使い、ロマンスと現実のアイロニックな距離を娯楽として提供できるのである。

2 描写とジェンダー

以上の点から当小説においては「ロマンス対現実的相続問題」という枠組みと女性論が問題視する性差に基づく公私の領域の二分が、受容論の観点で結ばれていることが分かる。つまりロマンスと現実及び私的女性性と公的男性性のそれぞれの二分が、家庭内でロマンスに共感するナイーブな女性（と想定される）読者と現実的で批判的な読みをする男性批評家という枠組みに収束する。しかしこのような一般的な二分法に反し、小説内世界においてはこの二つの領域の転倒が起こっている。ロマンスを体現するのは主人公の男性である。彼はことごとく女性的な要素を持つ登場人物であり、自分の未来を切り開くどころか、遠縁の親戚に当たる老婆の機嫌を損なわぬよう暮らし、自分に財産が残されるのを待つのが彼の役目である。彼が最大限に男性性を発揮する可能性のある戦場においてさえオーランドは早々に捕虜となり、友人の助けにより逃げ出すのである。彼はロマンスを読みふけり、塔に閉じ込められた娘に夢中になり、騎士のようにレイランド夫人に仕えている。彼の時代遅れな生き様は他の登場人物たちの揶揄の対象となる。オーランドの兄は以下のように彼をからかう。「俺たちは良く知っているんだ、ローランド閣下よ（ローランドはフィリップ・ソマリヴが弟を馬鹿にしてつけた名前である。）君は近隣の住人よりも聖人だなんてことは全くないってことを。…ベルグレーヴは一週間も彼女に夢中で、このダルシネアの住む塔にあるメイドを乱入させたんだ。その塔が獐猛なローランド閣下に守られているにも関わらずさ。—僕は彼女の名を知らないのだけれど。—なあ騎士殿あなた様の女神はなんと呼ばれているんだい？」（『オールド・マナ・ハウス』、170-71）この引用部分ではオーランドがロマンスの基準に即して行動している事が他の登場人物によって馬鹿にされており、さらにもそのような状況を読者が見落とさないように工夫されている。語り手によってローランドという名がオーランドを「馬鹿にして」つけられたのだという経緯を、本文を中断する括弧内の説明として挿入されている。また騎士のような振る舞

いにも関わらず、オーランドは恋敵の放った使者からモニミアの住む塔を守ることができないと示し、現実世界におけるオーランドの無力さが揶揄されている。また引用中モニミアは「ダルシネア」と呼ばれているが、「ダルシネア」に関してはテキストの別の箇所注がある。その注で「ダルシネア」とは偶像視され理想化された女性で、セルバンテスの『ドン・キホーテ』ではドン・キホーテの恋人であると説明されている。その上で『ドン・キホーテ』は「古典的なロマンスであるが、同時にロマンスの空想的な側面を表現するテキストである。その主人公は古典的な信じやすいヒーローで、騎士物語への彼の絶対的信頼が結果として彼の狂気と死を招くのである」（『オールド・マナ・ハウス』199）とラベは解説している。つまり兄フィリップによる弟オーランドを侮辱する言葉は、オーランドのロマンスが時代遅れで滑稽であり、現実的には何の力も持ち得ないことを読者に示している。

他の登場人物による主人公への批判は、宮廷恋愛の理想をアイロニックに劇化し、それと並行する経済問題を中心とするリアリスティックな視点は、金銭や相続、法廷闘争という世俗的な問題をめぐるストーリーを提供する。『オールド・マナ・ハウス』にはオーランドのもつロマンティックな恋愛観の延長上にある結婚と経済問題としての結婚の二種類が描かれる。後者の一例はホリーバーン氏が娘とオーランドを結婚させようとする箇所である。レイランド邸で開催されたパーティーに招待されたホリーバーン氏はソマリヴ家の兄弟を見て「これらの若者のうちのどちらがレイランド邸の主人となっても素晴らしく洗練されたホリーバーン嬢と非常につりあった相手となるだろう」（207）と考え、「ほんの少しの観察がオーランドを選ぶことを決心させた」（208）。ホリーバーン氏はすばやくレイランド夫人に自分の娘とオーランドとの結婚を仄めかすが、レイランド夫人はその提案を退ける。

経済問題としてのもうひとつの結婚は、オーランドの妹イザベラとトレイシー大佐のものである。65歳⁴⁾のトレイシー大佐は21歳であるイザベラの「父親よりもたっぷりと年を取って」（『オールド・マナ・ハウス』286）いるが、

非常に財産のある人物である。イザベラは誰の目から見ても「金のために結婚するのである」(『オールド・マナ・ハウス』290)。彼女の結婚はソマリヴ家を豊かにするものであり、大佐に軍での職を紹介してもらおうオーランドにとっては大変都合の良いことである。

イザベラは一旦承諾した大佐との結婚を目前に、彼の甥であるウォリックと駆け落ちする。しかしイザベラの駆け落ちは経済的な結婚からロマンティックな恋愛への移行とはならない。二人の駆け落ちはオーランドの「駆け落ちをしない」という決断と対照を成すからである。オーランドとウォリックは共にアメリカ出兵を控えている。叔父の結婚相手であるイザベラに恋をしたウォリックは出兵の際にイザベラを同行する決意を固め、オーランドもモニミアを連れて行ってはどうかと勧める。オーランドは「過ちを犯さないことによって惨めになります。ウォリックよ、君の勧めに従ったなら僕は惨めになるでしょう。どうせ不幸になるならば自分の不名誉からそうなるよりも、高潔さを保ったことにより不幸を味わうほうが良いのです」(344)と答える。二人はイギリスで再会し、互いにそれまでの人生を打ち明ける。オーランドの話聞いたウォリックは「さあ、親友よ。君の敬虔さは私の向こう見ずな行動よりも良い結果を招いたようではありませんね。私は愛する女性と結婚することによって叔父を苦しめ財産相続を逃しましたが、君は自分の情熱を美徳のために犠牲にしながらも、相続を逃してしまった。…私が愛する人を連れて行ったように、君もあなたのかわいい娘をアメリカへ連れて行ったところで、より悪い成り行きだったって事はないんじゃないかい？」(502)とからかう。これに関してオーランドは否定的な回答をするが、彼の出兵中に身寄りのないモニミアは乱暴なベルグレーヴに付きまといわれ、暴行される直前まで追い詰められたことを考慮すると、オーランドのロマンティックな理想の無力さが際立つ。

4) オーランドはトレイシーが65歳であるとはっきりモニミアに言っているが、テキストのほかの箇所ではトレイシーの年齢は「60歳に近い」(144)とされている。

以上のように『オールド・マナ・ハウス』においてはロマンスの持つ要素が批判されているが、それに対抗するリアリスティックな視点も理想化されていない。現実主義者であるオーランドの兄フィリップもソマリヴ家を救うことはできない。粗暴な性格ゆえにレイランド夫人の機嫌を損ねてしまい、財産相続の希望を絶たれたフィリップは、賭け事や馬鹿騒ぎに興じ、負債から何度も投獄され、行き倒れも同然の状態でオーランドに助けられ家族の元で息を引き取る。イザベラとの駆け落ちという現実的選択をしたウォリックも、再びトレイシー大佐と和解するまではロンドンで偽名を使い作家として細々と家族を養っていたのである。

『オールド・マナ・ハウス』においてはロマンスと経済問題は調和へ向かうことなく、批判的に並存することによって物語全体を奇妙で滑稽な据わりの悪いものにしていく。この作品の特徴を作者の立場に重ねる、つまりレディとして育ちながらも文筆業で生計を立てざるを得ない状況が、ロマンスと現実的世界観が混在した小説世界を構築したと考えることもできる。また相続権を奪われたオーランドの苦しい状況を、作者に代表されるような英国女性の法的立場に関する批判と読むこともできる。本論で取り上げている批評家たちが作者の伝記的な事実と物語内容との関連をすでに論じているので、ここではこれ以上立ち入らない。

3 欲望と誤読

最後に『オールド・マナ・ハウス』に見られる欲望と主要登場人物間で成立する誤読の連鎖という観点から、従来の批評家が作品内において対立していると指摘している二つの描写が収束する点について考えたい。レイランド夫人とオーランドの持つ近親相姦的な欲望が異なる対象に迂回することによって、現実には存在しない欲望の対象が遡及的に作り出される様を検証し、そのような近親相姦の欲望を諦めることによって構築される社会的主体が父権秩序へと編入されていく過程を跡付ける。このような推移と並行して、前社会的なロマン

スの世界から父によって支配される象徴秩序、つまり現実世界へと物語が移行するのである。つまり当小説に混在するとされるロマンス風の描写と現実的描写は、社会的主体の構築に伴う欲望の迂回という一連の成長物語として解釈することができるのである。

当小説における二つの異質な描写の衝突は、登場人物像にも及んでいる。主人公のオーランドというエキゾチックな名前は、ゆくゆくはレイランド夫人の財産を相続したいと考えるソマリヴ家の現実的な願望によって「いやいやながら与えられた許可から〔レイランド夫人の祖父である〕サー・オーランドの名を」(38) 頂いたものである。現実的な動機から与えられた名前は、祖父に代表される中世的なロマンスの世界を希求するレイランド夫人の願望と呼応する。彼女は祖父と同じ名前を持つ「オーランドを過去に存在した騎士にしたいと願い」(ウデン 154), 「彼に関する全ては彼女の時代遅れの考えへと同化され」(『オールド・マナ・ハウス』265) てゆく。レイランド夫人はオーランドが日に日にレイランド一家に似てくるので「もし服装が異なっていなければお爺様の絵が枠から歩いて出てきたのかと想像するところでした」(199) と考える。

レイランド夫人のオーランドの外見に関するロマンティックな思い込みは、彼の行動に関する誤読へと拡大する。オーランドはモニミアをめぐる争いでベルグレーヴと決闘するが、レイランド夫人は彼女の領地をベルグレーヴが荒らすことが決闘の原因だと考える。オーランドのアメリカ出兵に関しても、レイランド夫人は祖父が名誉革命で戦ったことを思い返し、オーランドと祖父を同一視する度合いを深める。しかしオーランドは相続できるか分からない財産を当てにするよりも、入隊してモニミアと結婚したいという希望から出兵するのだ。レイランド夫人が時代遅れのロマンティックな理想に執着し現実を認識しない点や、オーランドが彼女の理想に同化している様子は始終滑稽に描かれる。例えばレイランド夫人とオーランドの以下のやり取りである。レイランド夫人は「オーランドがこれほど祖父サー・オーランドに似ていると感じたこと

はなかった。二人は別れる前に多くの丁寧な言葉を交わし、彼女は10ポンドの小切手を彼に渡した。そして彼は彼女の手口に口づけをする榮譽を与えられたのだ」(102)。この場面ではレイランド夫人の妄想とそれに同調して騎士を演じるオーランドが描かれている。ロマンティックな宮廷恋愛風の描写の一方で、10ポンドという現実的な金額の提示は、将来について悩む若者に10ポンドと言う小額の切手を重々しい態度で与える老婆の吝嗇を前景化し読者の笑いを誘う。レイランド夫人の浮世離れした金銭感覚に関しては、語り手がさらに追い討ちをかける。出兵するオーランドにレイランド夫人は「250ポンドの小切手を与えた。…彼女は現代の費用に関してほとんど無知だったので、それを非常に大きな額だと本当に思っていたのだ」(266)。この場面に続いて、老婆はオーランドに対して自分を彼の銀行だと思ふようにと申し渡す。

レイランド夫人とオーランドの関係は、高貴な姫と彼女の名誉のために決闘し出兵する騎士のそれである。レイランド夫人にとって「騎士道の時代は過ぎ去ってはいないようである。というのも、彼女はオーランドを今まさに武装して初めての戦いに向かおうとしている高貴な若者と考えている」(『オールド・マナ・ハウス』265)からである。つまり、オーランドの行動は常にレイランド夫人によって与えられるロマンティックな解釈とモニミアを原因とする現実的な動機付けの二重の性格を帯びている。レイランド夫人はオーランドの行為を常に誤読し、現実には起こっていない彼女の願望の充足をオーランドの行為の中に認めている。

オーランドがモニミアを見る視点の中にも同様の誤読が含まれている。オーランドの最終目的は「モニミアと自分自身のために牧歌的なロマンスを創造すること」である(ウデン153)。モニミアとの関係に関してはロマンスの世界に浸りきっている彼は、モニミアがオーランド出兵中に会った数々の困難を打ち明けると、「未熟で信用しやすい小説またはロマンスの読者」さながらの反応をする(ウデン133)。オーランド不在中にモニミアを助けた若い男の話聞いたとたん彼は「気が狂ったようにいすから飛び上がり「なんてこった!

君は泣いていたんだね。…彼は[君が涙を拭いた手に]キスしたんだろ。分かっているさ、その男はそうしたに違いない。そうとも。この見ず知らずの男はベルグレーヴなんかよりも大いに危ない奴さ」(478)と叫ぶ。パートロメオも同様に、オーランドは「ばかげた嫉妬をし、彼女が他の男の名を挙げるといつも性急な詰問をしメロドラマ調の叫びを上げる。…彼は無能な読者のモデルを提供する」と論じている(“Subversion of Romance” 654)。彼はモニミアの語りをロマンスのパターンに則って解釈し、過剰に反応し嫉妬にさいなまれる。彼は周囲の世界をロマンスのコードで読み解き反応するフィーメール・キホーテであり、モニミアの話に誤った解釈を与えている。結婚後も彼は現実を正しく把握することができず、気高い理想に執着し、困窮する家計を助けるために現実的な解決を与えることができないうえ、モニミアが内緒で針仕事の内職に従事しても、その事実を認識することができない。「オーランドは彼女がいつも忙しそうであることを認めた。しかし彼女が何で忙しいのか問うことはなかった。そうして彼の傷つきやすさや自尊心に衝撃を与えることなくモニミアは彼らの生活がかかっている不足しがちな貯えに多少のものを付け加えることができたのである」(『オールド・マナ・ハウス』487)。オーランドは自らの理念にそぐわない現実を受け入れることができず、モニミアが忙しくしているあまりにも明白な理由を問うことができないのだ。

レイランド夫人はモニミアに対してより現実的な意見を持っている。彼女はモニミアの名前に関して始終不平を言い、レナード夫人に「なぜあの娘にあんな名前をつけたんだい？ 何しろあの娘は無一文じゃないか。何であの娘のおつむにロマンティックな考えを吹き込んだりするのさ。そんな考えは彼女が自分のパンを正直に稼ごうとするのを邪魔するかもしれないんだよ。—モニミアだって！ 二度とそんな名前を口にしたくないね。…彼女はメアリと呼ばれるべきだよ」(46)と言う。以降モニミアはレイランド夫人の前ではメアリと呼ばれ、ソマリヴ家にもメアリとして知られる。オーランドの父は彼がモニミアという名前を口にすると、そんな名前はオーランドの捏造だと思い、笑いをこ

らえられずこう言う。「モニミアだって！ ああ、哀れなせがれよ、なんだってお前の妖精をそんな名前と呼ぶほど行き過ぎてしまったのかい—モニミア！ 私たちは今そのことについて率直に話し合っているんだから、彼女をメアリと呼ばせてもらわなきゃならんよ」(173)。レイランド邸に来て以来2度しか領地を出たことのない(『オールド・マナ・ハウス』107)モニミアは、他の登場人物にとってはメアリであるか名もない存在であり、オーランドの「ロマンティックなドン・キホーテ的行動」(『オールド・マナ・ハウス』174)の対象である以外に存在しないに等しい。

モニミアの素性は孤児物語としては珍しく最後になっても明かされない。彼女はレナード夫人の姪であると曖昧に紹介されるものの、私生児であり、さらにはレナード夫人自身の私生児である可能性までも仄めかされている(『オールド・マナ・ハウス』112, 236)。彼女の素性は物語の中心にある謎であり、プロットを動かす空白である。彼女はオーランドにとっては塔に閉じ込められた姫であり、他の登場人物にとってはメアリもしくはレイランド邸にオーランドを惹きつける謎である。

オーランドはモニミア本人の魅力というよりは、彼女の置かれたロマンティックな状況ゆえに彼女を愛している。「モニミアの幽閉された状況、叔母の彼女に対する冷酷な態度、打ち捨てられた境遇が最も優しい哀れみの情が初めての情熱の熱烈さに付け加えることのできる感情全てを彼の心に生じさせていた。元来熱烈で快活な性質、最近彼が読んでいる本、彼を取り巻く状況、彼の名前などの全てが、彼の特徴であるロマンティックな熱狂を何かしら促すものであった」(『オールド・マナ・ハウス』56)。ロマンティックな名をもつオーランドはロマンスを読み耽り、現実のロマンスを求め幽閉されたモニミアを愛しているのである。オーランドは自分のロマンティックな空想を演じるために、モニミアの置かれた状況を愛しているのである。オーランドにとっては「彼女のためにこうむる危険が大きいほど、モニミアがより愛しくなるのである」(『オールド・マナ・ハウス』278)。これは彼が騎士を演じる自分に満足して

いる事を示している。だからこそアメリカ出兵の際にも、オーランドはモニミアを連れて行くという現実的な手段を選ばず、打ち捨てられたモニミアに降りかかる危険の重大さなど考慮に入れず彼女を一人置き去り、高潔な決断を下す自分に満足するのである。オーランドにとってモニミアは幻想の対象であり、他の登場人物たちにとってのモニミアと同様に現実的な存在ではない。モニミアはオーランドの欲望が生み出す幻想であり、身寄りのない孤児として社会的位置のない過剰な空白である。

ロマンティックなオーランドを媒介としてモニミアとレイランド夫人は奇妙な関係を結ぶ。レイランド家最後の生き残りである老婆と孤児モニミアは富と血筋と言う点から対極にあるキャラクターだが、レイランド夫人と彼女が象徴する富、そしてレイランド家に閉じ込められた姫であるモニミアはオーランドを媒介として等価の関係を結ぶ。レイランド夫人の財産は小説を動かす動機としてほとんど全ての登場人物の欲望の対象であり、夫人は持っている財産または財産の行方を決定する遺書とほぼ等価の存在である。レイランド夫人の存在とほぼ等価物である彼女の遺書は、レイランド邸の小さな部屋の引き出しの中の鍵がかけられた小箱から発見される。遺書のありようは遺体となってレイランド家の棺置き場に安置された夫人の状態と類似している。またレイランド邸の秘密の場所に閉じ込められた状態はモニミアが屋敷の中で置かれていた状態と同様であり、秘密の通路を通してモニミアと密会していたオーランドは、秘密の通路を通してレイランド夫人の遺書を見つけ出すのである。モニミアを求めるロマンス同様、遺書発見の状況もまたロマンスの一場面のような瞬間における不安の中で、オーランドはその場面が古いロマンスやおとぎ話のなかでしばしば目にする場面と似ていると思わざるをえなかった(517-18)。こうしてオーランドのロマンティックな探求はレイランド夫人の遺書発見で終わり、彼はモニミアとの幸福な生活を手にいれる。

ラベも指摘しているように物語開始時においてレイランド家の直系男子はす

でに死に絶えている (“Metaphoricity and the Romance of Property” 219)。もはや不可能となったレイランド家の存続を願うレイランド夫人には、オーランドがレイランド家の爵位を授かった祖父に先祖がえりをしたという幻想を抱く他に希望はない。これが彼女を支える一つの望みであり、オーランドがアメリカで死んでしまったというニュースを聞いて、彼女の健康は見る間に衰え死んでしまう。しかしソマリヴ家が代々身分の低い者と結婚したことによりレイランド家を相続するに相応しくないと考える夫人が、オーランドだけに高貴さを見出す現実的な理由はなく、レイランド夫人の望むような跡継ぎなど現実には存在しない。不可能を可能にするのはレイランド夫人のロマンティックな幻想のみである。直系男子の絶えたレイランド家の財産は、モニミアと同様誰に属するでもなく社会に浮遊する孤児である。モニミアという名の意味に関してレナード夫人は「孤児という意味であり、たった一人残され見捨てられた者という意味」(47) だと述べている。これはレイランド家の財産及びその末裔としてたった一人残された夫人の状況を表しているようでもある。小説全体を突き動かす権力の源泉であるレイランド家の財産が、主人公であるオーランドを媒体として空白であるモニミアと関連付けられるとき、小説全体をどのように再解釈することができるのだろうか。

当小説における経済的な問題とロマンスへの欲求はオーランドがモニミアと結婚し財産を相続することで同時に満たされ、レイランド夫人、彼女を象徴するレイランド家の財産、モニミアという社会的過剰はオーランドに属することによって父権社会に再編入される。これは上に見たように連続した誤読の連鎖によってもたらされる。レイランド夫人はオーランドに、彼はモニミアの中に自分の幻想の対象を見ているが、それらは各自の幻想が作り出す対象で実体のないものである。これは欲望が対象と結ぶ遡及的な関係であり、「欲望はあらかじめ与えられるものではなく我々が作り上げるものである」(25) というジジエクの言葉と呼応する。レイランド夫人は祖父のような相手、おそらくは祖父に象徴されるようなレイランド家の父親を望んでいるために、自らの高貴さ

を「50年から60年の間〔彼女〕を取り囲んできた数多くの求婚者たちと分け合うことによって減ずる事」(37)ができなかったのである。「彼女は1698年の彼女の父の結婚のために装飾されて以来、調度品も家の回りも少しも変わっていない古い邸宅にほとんど一人で住んで」(40)おり、父と彼が体現するレイランド家、その象徴であるレイランド邸と結婚しているも同然である。未婚の彼女に与えられたレイランド「夫人」という敬称は、この点から非常に意味深いものとなる。レイランド夫人の死者や近親者に向かう願望は、オーランドへ向かう欲望へとすり替わることによって受け入れ可能な様相をつくろうが、オーランドは彼女にとって祖父であり、求婚者であり、彼女の財産を相続する息子である点から、彼女の欲望の持つ近親相姦的側面が明らかになる。

落ちぶれた家系の次男に相応しくないオーランドのロマンスへの傾倒は、彼のみがレイランド夫人によって屋敷への出入りを許され、レイランド家所蔵の書物を読みふけたことが原因である。モニミアという名前が彼女にロマンティックな考えを吹き込む危険をレイランド夫人が指摘したように、オーランドという名前も彼のロマンティックな性質の原因となっている。そしてその名前はレイランド夫人の許可によって与えられたものである。つまり彼のロマンティックな性質の多くはレイランド夫人に起因するものである。オーランドはレイランド夫人の理想である祖父の名前を名乗り、彼女が祖父と見紛う青年となる。オーランドの成長、就職、結婚に及ぶ全ての決定権を持つレイランド夫人は彼の母親に等しい存在であり、オーランドは母親の望む姿に成長しようとする息子である。実際レイランド夫人はオーランドに「息子よ」(125)と呼びかけている。連れ出してくれる騎士も居らず、城に閉じ込められているのはレイランド夫人であり、ロマンスに耽溺するオーランドは母親像に似た高貴な血筋の姫を求め、夫人と等価となるモニミアを愛するのである。

レイランド夫人とオーランドの関係はそれぞれの近親相姦的な欲望が第三者へと投影された結果、互いに成功した誤読の関係として成立している。レイランド夫人は祖父の姿をオーランドに映し、オーランドは母親的存在であるレイ

ランド夫人の影をモニミアに見ている。欲望という観点から、従来は当小説内で拮抗する二つの問題として扱われた経済問題とロマンスは、近親者へ向かう願望が、第三者に転移した結果生ずる分裂であることが分かる。コプチェックによると、近親相姦の欲望を抑圧することに基礎をおく社会秩序においては、「法は、単純明快に欲望を持つ主体を構築するのではなく、自らの欲望を拒絶し、そのような欲望を望まない主体を構築するのである。そこで、主体は自分の欲望から引き裂かれたものとして認識」(コプチェック 41) される。つまり作品内で対立する2つの描写方法は父権社会が要請する欲望の迂回の結果生ずるものであり、それに従い近親相姦の欲望を諦めることにより、社会的位置を剥奪されたものが再び父権社会へ参加することが可能となるのである。

以上のように『オールド・マナ・ハウス』の結末では孤児、未婚女性、直系男子の絶えた家系、次男など長子相続を基盤とする父権社会では周縁化される要素が最終的には父権秩序へと組み込まれる。社会的位置がないゆえに女性的キャラクターであったオーランドは、結末ではレイランド家の跡取りとなり、レイランド家とその財産は彼に属するものとなる。その過程は近親相姦的欲望を第三者へと転嫁し父が支配する象徴界へ参入するという一般的なエディプスコンプレックスを基盤とする成長物語である。

ラベは『オールド・マナ・ハウス』の結末において回復される秩序は、ジェームス一世によって与えられた爵位をオーランドが相続した財産によって買い戻すことによって、封建主義的秩序から金銭に基づく近代的資本主義秩序へ移行していると指摘している(“Metaphoricity and the Romance of Property” 228)。当小説が近代的資本主義へ移行していると考えられるのは、ラベの指摘する点に加えて、オーランドの欲望によって二人の女性が最終的には財産へと読み替えられるからである。孤児モニミア、未婚のレイランド夫人と彼女に守られる財産は、社会に流通することのない不毛なものである。つまり男性によって所有されない財産や女性は父権社会においては不毛であり、それらは男性間で交換されることによって初めてその価値を発揮し、余剰を生む可能性を現すので

ある。オランダによって継承されたレイランド邸は荒れ果てた建物が再建され、モニミアは新たな継承者となる男の子を生む。

本作品はエディプスコンプレックスによって抑圧される近親相姦的欲望が遡及的に対象を生み出すことによって社会的主体が構築されることを示している。主人公の欲望の架空の対象であるモニミアは、父の名によって保障される象徴秩序が主体の欲望に要請する見誤りであり、彼女は物語の「最終のページでは事実上消えてしまい、語り手の“美しい妻”や“愛らしい母親”という描写によってのみ現れる」(“Subversion of Romance” 646)。『オールド・マナ・ハウス』は欲望がありもしない対象へ向かい、主体が対象を見誤る点及びそのような欲望の誤読により再生産される父権社会のありようを描き出すドラマであるといえる。

参考文献

- Bartolomeo, Joseph F. “Charlotte to Charles : *The Old Manor House* as a Source for *Great Expectations*.” *Dickens Quarterly* 8.3 (1991 Sept) : 112-20. [“Charles to Charlotte”]
 ---. “Subversion of Romance in *The Old Manor House*.” *SEL* 33.3 (1993 Summer) : 645-57. [“Subversion of Romance”]
 Fletcher, Loraine. “Charlotte Smith’s Emblematic Castles.” *Critical Survey* 4.1 (1992) : 3-8.
 Hunt, Bishop C. “Wordsworth and Charlotte Smith : 1970.” *The Wordsworth Circle* 35 (2004) : 80-91.
 Kaufman, Paul. *Collected Papers in Library History*. London : The Library Association, 1964.
 King, Kathryn R. “Of Needles and Pens and Women’s Work.” *Tulsa Studies in Women’s Literature* 14 : 1 (1995 Spring), 77-93.
 Labbe, Jaqueline M. “Metaphoricity and the Romance of Property in *The Old Manor House*.” *Novel : A Forum on Fiction* 34.2 : (2001 Spring), 216-31. [“Metaphoricity and the Romance of Property”]
 Smith, Charlotte. *The Old Manor House*. Ed and Intro. Jacqueline M. Labbe. Canada : Broadview, 2002. [『オールド・マナ・ハウス』]
 Uddén, Anna. *Veils of Irony : The Development of Narrative Technique in Women’s Novels of the 1790s*. Diss. Uppsala U, 1998. Uppsala, Sweden : Uppsala University, 2000.

コプチェク, ジョアン 『私の欲望を読みなさいーラカン理論によるフーコー批判』 梶理和子他訳, 青土社, 1998

ジジェク, スラヴォイ 『斜めから見るー大衆文化を通してラカン理論へ』 鈴木昌訳, 青土社, 1995